

## 自己評価報告書

平成23年 5月11日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520285

研究課題名(和文) ギリシア・ローマ文学における他者との共生に関する研究

研究課題名(英文) Study of the Symbiotic Relationship with the Other in Greek and Roman Literature

研究代表者

小川 正廣 (OGAWA MASAHIRO)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：40127064

研究分野：西洋古典学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ギリシア、ローマ、他者、共生

## 1. 研究計画の概要

本研究は、西洋古代世界における固定的な他者差別や他者排除からの脱却化指向にともしない必然的に生じてくるより高次元の他者との共生の観念と共生の意識に着目し、そうした新たな人間観・社会観・自然観の形成と発達のプロセス、そして問題点などの実相について、ギリシアとローマの両古典文学のジャンル横断的な分析と考察によって明らかにすることを目的とする。具体的には、(1) 叙事詩文学を対象として、個人および共同体の諸関係における自由と共生の観念の変遷を跡づける。(2) 他者としての自然との共生の観念と意識について、教訓詩文学を対象として分析する。(3) 悲劇・喜劇において、社会的関係における優位・劣位の他者との共生のテーマを考察する。(4) 思想家・宗教家における人間の自由と人類共生に関する言説を比較検討する。(5) 歴史書や地理学書に見られる異民族・異宗教との共存・共生の事例について検証する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 古代ギリシア・ローマの叙事詩文学における共生について考察した結果、まず明らかになったのは、共生に関するギリシア人とローマ人の観念の相違である。実際ホメロスの『イリアス』では、共同体間の戦争は、個人が名誉と栄光を獲得する機会であると同時に、究極的には運命や神々が定めた不可避で永続的な人間存在の条件として捉えられており、他方、平和は戦争のために決定的に失われ、恒常的に戦うべく宿命づけられた個人や共同体が永久に断念せざるをえないものとして示されている。しかしウェルギリウスの『アエネーイス』においては、そうした

ホメロスの戦争観が根本的に見直されて、むしろ戦争は極力回避すべき非人間的な事態として否定的に描かれ、それはただ平和と共生を達成する手段として必要不可欠な場合にのみ正当化されうるというメッセージを読み取ることができる。これまでの本研究では、この代表的両古典作品の綿密な文学的分析から浮かび上がった相違の考察をとおして、人類の目標としての共生という、ローマ文明が世界の歴史にもたらした大きな転換とその影響を明確な形で提示することができた。

(2) この研究成果は、著書『ウェルギリウス『アエネーイス』— 神話が語るヨーロッパ世界の原点』(岩波書店)として刊行し、全国学会(日本西洋古典学会)の機関誌や全国紙(朝日新聞、下記〔その他〕の欄参照)の書評記事にも取り上げられたほか、国内の学術集会などでも一部を発表した。さらに、日本語圏内の市民・有識者や研究者に伝えるのみでは不十分だと考えたため、外国からの招聘に応じて韓国と中国での国際的な会議において英語による講演を行ない、アジア隣国と欧米の知識人・学者・学生に学術的討論の話題を提供した。

(3) 以上の進捗状況を省みて、人文学・古典研究はそれ自体の専門的環境に埋没することなく、そこから得られた成果に対してより一般的レベルの評釈をみずから施して敷衍することにより、古典が内蔵する現代的意味を同時代の世界と社会に対して開示し、いっそう広汎な人々との対話と批判を取り入れていく方法もまた、総括的には重要で効果的な研究方法となることを再確認した。さらにその意味では、本研究代表者小川が NHK 文化センター(名古屋)で永らく担当している

市民・社会人向けの西洋の古典と文明に関する講義(毎年 24 回)も、最新の学術研究の社会還元への役割を果たすとともに、本研究自体の深化と意義づけに貴重な養分を提供してきた。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)「研究計画の概要」で述べた5つの細分課題のうち、(1)については、古代叙事詩文学の成立基盤になった文字使用の発達に関する学術的討論の成果も付随的に加えつつ、ほぼ3年間費やして当初の計画以上に進展した。だがその反面、(2)と(3)の課題については、資料の蓄積と基礎的な分析・考察は進んではいるものの中間的なとりまとめ作業にやや遅れが生じた。

### 4. 今後の研究の推進方策

上述の(2)と(3)および今年度の課題のとりまとめを促進するために、現在次の3点の方策を構想している。

(1)他者としての自然との共生の観念と意識については、地中海周辺で行なった古代遺跡・考古学博物館での調査の成果を新たに取り入れ、「平地」「海」「山地」の地理的概念による分類を導入して教訓詩文学の考察を進める。

(2)悲劇・喜劇における優位・劣位の他者との共生のテーマについては、すでに刊行した『ギリシア・ローマ世界における他者』所収の論文「他者イメージの変容」の論旨を他の諸作品にも敷衍して展開する。

(3)思想家・宗教家における人間の自由と人類共生に関する言説の比較検討に関しては、ギリシア以来の諸教説をセネカの倫理論説(とくに『恩恵について』)を中軸に据えて集約的に検討する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①小川正廣, 「「文字の力」趣旨と総括、「文字使用と手紙」, 『西洋古典学研究』58, 2010年, pp.110-112, 117-120, 査読有
- ②OGAWA Masahiro, 'War and Peace in the Iliad and the Aeneid', "The Journal of Greco-Roman Studies" 36, pp.1-22, 2009年, 査読有
- ③小川正廣, 「ウェルギリウス『アエネイス』におけるトロイア伝説とその受容」, 『日本英文学会第81回大会 Proceedings』, pp.185-187, 2009年, 査読有
- ④小川正廣, 「古代叙事詩における戦争と平

和」, 『名古屋大学文学部研究論集(文学)』160, pp. 1-29, 2008年, 査読有

[学会発表] (計4件)

- ①OGAWA Masahiro, 'War and Peace in Ancient Greek and Roman Epic Literature: Homer and Virgil', Academic Meeting of the Institute for the History of Ancient Civilizations, 2010年7月7日, 東北師範大学世界古典文明史研究所(長春市, 中国)
- ②小川正廣, 「Vergilius "Aeneis"におけるトロイア伝説とその受容」, 日本英文学会第81回大会, 2009年5月30日, 東京大学(駒場キャンパス)
- ③OGAWA Masahiro, 'War and Peace in Homer and Virgil', The Korean Society of Greco-Roman Studies, Winter Symposium, 2008年12月13日, Soongsil University(ソウル市, 韓国)

[図書] (計3件)

- ①小川正廣, 岩波書店, 『ウェルギリウス『アエネイス』— 神話が語るヨーロッパ世界の原点』, 2009年, 計198頁

[その他]

報道関連情報

- 「現代的意味の理解みずみずしく——小川正廣著、ウェルギリウス『アエネイス』— 神話が語るヨーロッパ世界の原点, 岩波書店」, 朝日新聞, 2009年4月19日(日)書評欄, 評者: 作家・日本ペンクラブ会長阿刀田高